The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 連鎖劇の研究 : 明治・大正期の映画と演劇の関係をめぐって |
| Author(s) | 横田, 洋 |
| Citation | 大阪大学, 2010, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/58548 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【6】

| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 横　田　　洋（よこた　ひろし） |
| 博士の専攻分野の名称 | 博　士（文　学） |
| 学　位　記　番　号 | 第　２４１５５　号 |
| 学位授与年月日 | 平成22年9月22日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当<br>文学研究科文化表現論専攻 |
| 学　位　論　文　名 | 連鎖劇の研究―明治・大正期の映画と演劇の関係をめぐって― |
| 論文審査委員 | （主査）<br>教　授　永田　　靖<br>（副査）<br>教　授　市川　　明　　教　授　上倉　庸敬 |

## 論文内容の要旨

本論文は、大正時代に流行した連鎖劇を近代日本演劇史の中に位置づける研究である。連鎖劇とは映画フィルムの映写と舞台上での俳優の実演を交互に行う形態の芸能で、大正時代に全国的に流行した。その残存する資料の少なさからほとんど研究を進めることができなかったが、本論文では数多く残存する番付（そこには場面の場割や一部の舞台場面の写真や映写された映画の写真などを見て取ることができる）を最大限に生かして、作品の質的な部分までも分析した画期的な論文となっている。A4 判縦書き 2 段組で 144 頁からなり、連鎖劇の発祥から衰退までを、その番付はもちろん、その時代の演劇取締規則の検討、山崎長之輔や衣笠貞之助などの連鎖劇を担った演劇人の活動の実態、残された台本などによる作品分析などを行い、その実態の解明と演劇的な特徴を明らかにするものである。

第 1 章と第 2 章では、浅草公園第 6 区の見世物と映画について、明治期の芸能取締との関係をつぶさに検討しながら、見世物小屋で興業された周辺ジャンルについて明らかにした。とりわけ都踊、浪花踊、中村歌扇一座などの実態をつぶさに解明している。また演劇的な見世物に対する取締が、徐々に緩み、連鎖劇誕生に至る流れを描き出している。第 3 章から第 5 章は大阪での連鎖劇の生みの親である山崎長之輔その作品について詳細に分析した。台本と場割の記載された番付を詳細に検討することで、そのメロドラマ的特質はもとより、挿入される映画場面がアトラクション的効果の強いものであることが明らかにした。同時に連鎖劇は山崎長之輔において初めて演劇と映画の本格的な接合を可能にし、これが連鎖劇の全国的な流行を促すことになったことを示した。

第 6 章と第 7 章では映画が自立的な芸術として主流の娯楽になっていくに従って活動写真取締規則が強化され、衣笠貞之助の連鎖劇はほとんど心理的な描写に近いものを獲得しており、連鎖劇としての芸術性を高い次元で実現していることを明らかにすると同時に、連鎖劇が徐々に衰退していく様相を分析している。演劇の中に映画が差し挟まれているものと、映画の中に演劇が挿入されているものと、その結合の割合にかなりの相違があることが明らかにされ、挿入される映画場面が次第に少なくなって行き、ついにはジャンルとして消滅するまでが描き出されている。

第 8 章と第 9 章では、大正時代の演劇と映画の関係を、井上正夫と小山内薫を取り上げて、いわば大衆的に人気を博した井上正夫とその一座が様々なジャンルの演劇を横断的に上演していったモダニスト的な側面があることを指摘した。また小山内薫の『ある敵討』という作品に表現主義的映画の影響が顕著に見いだせることを明らかにし大正時代の小山内の演劇映画的位置を明確にした。



## 論文審査の結果の要旨

本論文は、日本近代演劇史の中でしばしば言及はされるもののまとまった研究がほとんどなかった連鎖劇についての、最初の本格的な研究と言えよう。連鎖劇を単に演劇と映画の接合形態と考えるばかりではなく、その誕生を明治期の見世物小屋の諸芸の想像力の中に求めた点も新しい。しかし何よりも本研究が日本演劇史研究の特筆すべき功績と考えられるのは、連鎖劇の実相を詳細に明らかにし得た点である。膨大な数の番付をつぶさに検討し、残存している数少ない台本から丹念に上演を再構築していく手法は演劇史研究の正統性を示したものと言えよう。とりわけ第 3 章～第 5 章の山崎長之輔研究の部分は新しい資料を豊富に用いたもので、演劇史的価値は高い。今後連鎖劇を研究する時には参照すべき基本的研究となると考えられる。また通常はアヴァンギャルド映画監督として言及されることの多かった衣笠貞之助の連鎖劇時代の活動とその作品の性質について明らかにし、その映画挿入部分が他の一般的な連鎖劇の映画場面とは一線を画しており、ほとんど心理的な奥行きを表現し得たということを明らかにしたことも本論文の功績としてあげられる。総じて論文自体は、映画と演劇は制度的には厳格に区別されたジャンルであったが、実態として両者の関係は極めて流動的なものであったことを示し得ていると考えられる。連鎖劇は演劇と映画という二つの異なるメディアを用いて効果的に物語を語るという芸能ではなく、両者が交互に入れ替わる直接的な刺激が強く出た芸能であることを明らかにした点も、今後の研究に有意義な考察となっている。

本論文に関する口頭試問は、2010 年 8 月 10 日（火）、およそ 1 時間 30 分にわたって実施した。そこでは高い評価が認められながら、全体的には現象面を詳細に記述することが中心となっていること、歴史的研究としながらその歴史的推移の原因についての洞察はしばしば希薄であること、連鎖劇の衰退の理由についての論及が弱いことなどが指摘された。またいわゆる正統的な演劇とは別に位置している「小芝居」の系譜の意義は認めながらも、その芸術的意義については議論し切れていないことなどが議論を通じて明らかになった。しかしこれらは本論文全体の功績と比較すれば、すぐには解決しきれないあまりに大きな問題群であり、今後の課題としてこれからの研究に期待するべきもので、本研究が示した基本的な意義を損なうものではない。以上の成果により、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。